

シリーズ「遺跡を学ぶ」

155

極彩色壁画の 発見

高松塚古墳・キトラ古墳

廣瀬覚・建石徹

新泉社



極彩色壁画の発見

―高松塚古墳・

キトラ古墳―

廣瀬覚・建石徹

【目次】

第1章 極彩色古墳壁画の発見	4
----------------	---

- | | |
|---------------|----|
| 1 高松塚古墳壁画の発見 | 4 |
| 2 キトラ古墳壁画の発見 | 10 |
| コラム1 古墳の名称の由来 | 15 |

第2章 壁画発見の余波	16
-------------	----

- | | |
|------------------|----|
| 1 高松塚古墳・キトラ古墳の特徴 | 16 |
| 2 考古学以外の学問分野への影響 | 26 |
| 3 飛鳥ブームの到来 | 41 |
| コラム2 石室と石槨 | 44 |

第3章 壁画の保存をめぐる	45
---------------	----

- | | |
|---------------------|----|
| 1 高松塚古墳壁画のとり出しに至る経緯 | 45 |
| 2 キトラ古墳壁画のとり外しに至る経緯 | 52 |

コラム3 国宝修理装演師連盟

55

第4章 近年の調査成果が語る新事実	56
-------------------	----

- | | |
|--------------|----|
| 1 古墳の構築過程 | 56 |
| 2 石室の構築技術 | 62 |
| 3 その他の考古学的成果 | 68 |
| 4 考古学以外の成果 | 72 |
| コラム4 被葬者は誰か | 77 |

第5章 未来に伝える	78
------------	----

- | | |
|---------------------|----|
| 1 高松塚古墳・キトラ古墳の歴史的意義 | 78 |
| 2 未来に伝えるために | 82 |
| 3 まとめ | 91 |

参考文献

92

編集委員

勅使河原彰(代表)

小野 昭

小野 正敏

石川日出志

小澤 毅

佐々木憲一

装幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵

第1章 極彩色古墳壁画の発見

1 高松塚古墳壁画の発見

発掘調査に至る経緯

日本の考古学や古代史に関心のある方で高松塚古墳の名を知らない人はいない、といっても過言ではないだろう。飛鳥の片隅で静かに眠っていた小さな古墳が、一躍、古代史の表舞台に躍り出ることになったのは、一九七二年三月のことであった(図1)。奈良県明日香村から委託を受けた橿原考古学研究所(現、奈良県立橿原考古学研究所)が発掘調査を実施し、わが国で初となる極彩色古墳壁画を発見したので。発掘調査は、関西大学名誉教授で橿原考古学研究所所長の末永雅雄が指揮をとり、同所員の秋山日出雄、網干善教、伊達宗泰の三名が現地調査を担当、網干が助教授を務める関西大学の学生四〇名ほど(龍谷大学の二名を含む)の参加を得て実施された。

高松塚古墳を発掘調査するきっかけは、その三年ほど前にさかのぼる。一九六九年四月に地元住民が古墳の南に掘ったシヨウガ穴の底で凝灰岩製の方形切石を発見した(図2)。シヨウガ穴とは、この地域でシヨウガやイモを貯蔵するために掘られる穴のことで、切石とは鉄製工具で各面を平坦に人工加工された石材のことである。凝灰岩切石の発見は、切石で組まれた石室の存在を示唆するもので、その知らせはやがて明日香村役場の観光課長・山本幸夫の耳に入り、橿原考古学研究所の藤井利章を通じて末永所長へと伝えられた。一九七〇年一〇月には、網干と関西大学、龍谷大学の学生らによって古墳の現状観察と測量調査が実施されている。

高松塚古墳壁画の発見当時、わが国は国土開発のまっただ中であつた。その波は飛鳥にも押し寄せ、開発から遺跡をまもるための対策が急務となつていった。一方、飛鳥の遺跡保存を模索する計画のなかで天武・持統天皇陵(野口王墓古墳)や中尾山古墳、文武天皇陵(栗原塚穴古墳)などをつなぐ史跡見学の遊歩道整備の話も、もち上がつていった。ルート上に位置する高松塚古墳についても、基礎データ収集のための発掘調査を求める声にわかに高まつた。こうした機運に加えて、明日香村誕生一五周年を記念して



図1 ●発掘前の高松塚古墳(1971年撮影)
のどかな田園風景のなかにたたずむ古墳。竹林のなかに埋もれた中央の高まりが墳丘。

の『明日香村史』編纂事業のなかで内容が明らかでない遺跡を調査していく構想もあり、最終的にその一環として高松塚古墳の調査が実施されることになった。

調査団が現地入りした三月初頭、飛鳥は春先にもかかわらず数日、雪に見舞われた。初日（一日）は積雪が多く、翌二日からようやく測量調査に着手。六日の慰霊祭を経て、七日によく墳丘に鍬が入れられた。そこから、壁画発見の瞬間までは一四日間。序盤で、前述のショウガ穴の底でみつかった凝灰岩切石が石室の一部ではなく単独で存在することが明らかとなる。その後の作業は、盗掘者が石室へ進入するために掘り壊した部分（盗掘坑）の再掘に費やされた。三月十九日、ついに石室に到達。そして運命の日を迎えることになる。

壁画の発見

三月二一日、前日の降雨からの天候回復が十分ではないなか、調査が開始された。正午過ぎ、学生たちを昼食にいかせ、網干は見張りを兼ねて学生二人と現場に残って作業をつづけた。盗掘坑を掘り抜き、石室内部をのぞき込んだ網干は、最初に壁に青い色、さらに緑色を目撃した。苔かカビでも生えているのか？ 目を凝らしているうちに茶色い紐のようなものが、そしてそ

の上に顔のようなものがみえてきた。網干の目は、石室入口に近い西壁の男子群像を捉えていた。盗掘坑から注ぎ込む光は限られており、薄暗い石室内で目にしたものはあるいは錯覚かもしれない。網干は学生二人にも相次いで石室内をのぞきこませた。

暗闇に目がなれなかったことに加えて、恩師にからかわれているとの思い込みから、当初、学生の目は壁画を捉えることができなかった。「しばらくじっと見ておれ」。執拗にうながされ、学生の目にもようやく人物の壁画が映った。三人の目をとおして壁画が幻想ではないことが確実になると、先に昼食にいった学生たちを呼び戻した。

「現場で何が起こったのか」。学生たちは古墳へ全力疾走した。極度の興奮から、呼び戻した学生たちに伝えた言葉を網干は覚えておらず、後に学生の日誌からその内容を知ることになる。

「人間一生の間には大変なことに会うことがある。君たちはこれから古墳の中をのぞくと、絵が描いてあるのを見ると思う。古墳を発掘して、そういうものに出会うことは人間一生の間にめったにないことだ。こういうときは、あわててはいかん。それと、このことは、誰にも言うたらいかん」。箝口令かんこうれいと引き換えに、学生たちは一人ずつ石室内をのぞいた（図3）。



図2 ● 発掘調査の端緒となった凝灰岩切石
中央にみえる方形の物体が切石。一辺59cm×高さ36cm。墓碑、礼拝石、献花台など諸説があるが、明確な用途は不明。



図3 ● 盗掘坑の奥に検出された石室
盗掘者が掘った坑を再掘し、石室南端に到達。南壁石にうがたれた孔から北壁の玄武がみえる。

壁画発見後の対応

冷静さをとり戻した網干は、宮内庁と文化庁の会議で上京していた末永に電話で第一報を伝えた。末永は関係機関への連絡を指示するとともに、みずからは壁画の写真撮影の手配に動いた。京都にある便利堂は美術品の撮影・印刷の老舗で、法隆寺金堂壁画を撮影した経験を有するなど、専門的で高い撮影技術には定評があった。

壁画発見当日は、石室内の壁画の概略を把握して作業を終了。翌日から石室内部の調査が本格化し、人物像、四神図、日・月像、星宿図からなる壁画の全体構成、石室内部のくわしい構造などが明らかにになっていった。発掘現場では、昼夜を問わず交替で監視体制がしかれた。

便利堂の撮影班が石室内に入ったのは、二二日午後四時半。石室内部は幅一〇三センチ、高さ一一三センチ、奥行二六五センチ。押入れ一段分ほどの狭い空間である。高さのない石室内での撮影に備えて、通常の三分の一の長さに脚を切断した三脚が用意された。特製の三脚の上

に大型カメラを据えて、いわゆる「飛鳥美人」（西壁女子群像）をはじめとする極彩色壁画がつぎつぎと撮影されていく。初回の撮影は午後八時まで続いた。さらに二四日、二回目の撮影が朝一〇時から夜九時頃までつづけられた。そうして撮影された画像が、同年一〇月刊行の『壁画古墳 高松塚』をはじめとして、その後のさまざまな出版物のカラー図版を飾ることになる。

三月二六日、現地に近い明日香村立阪合小学校講堂に報道関係者が集められた。壇上には、末永と網干そして岸下利一村長の姿があった。末永が発掘と壁画発見の経緯を説明し、各社に壁画の写真が配布された。「実物をみたうえで記事が書きたい」。一人の記者の申し出から、一社五分ずつ、合計七社の現地取材が許された。「高松塚の壁画は、焼失した法隆寺の金堂壁画に匹敵する」。末永が漏らした言葉は、記者たちに事の重大さを知らしめた。その晩、まずはテレビから報道解禁となると、NHKは九時台のニュースで、壁画発見の知らせを中継で生々しく全国に伝えた。新聞各社は翌日の朝刊で、「飛鳥から壁画古墳」「法隆寺級の壁画発見」「極彩色で



図4 ●高松塚古墳壁画発見を伝える新聞報道
当時、全国紙の1面に考古学の話題が載るのはめずらしかった（朝日新聞一面、1972年3月27日）。



図5 ●墳丘の前で観光客に調査の経緯を説明する網干善教
1972年4月上旬。壁画発見の報道以降、高松塚古墳には多くの観光客が押し寄せた。網干は連日古墳周辺で調査の経緯を説明した。この日はこのほか子どもが多く、網干の語りかけもおのずとやさしい口調になったという。

男女や星座」などの見出しを打ち、世紀の大発見を大々的に報道した(図4)。

これをきっかけに考古学・古代史ブームが巻き起こり、明日香村には大勢の観光客が訪れることになる(図5)。また高松塚古墳はその重要性に鑑み、国(文化庁)に管理がゆだねられることになった。

2 キトラ古墳壁画の発見

第二の壁画古墳を求めて

高松塚古墳壁画の発見から六年後の一九七八年、マルコ山古墳とよばれる高松塚古墳によく似た古墳が発掘調査されることになった。第二の壁画古墳の発見に期待がふくらんだが、石室内壁には白く漆喰が塗られているのみで、壁画が描かれた形跡はなかった(図6)。石室の構造は高松塚古墳と酷似しているのに、なぜ壁画は描かれていないのか? マルコ山古墳の発掘はさらなる謎を生んだ。

このマルコ山古墳の発掘時に、高松塚古墳から一キロ南の阿部山集落にも似たような古墳があると情報が寄せられた。字ウエヤマ、通称「キトラ」、現在のキトラ古墳である(図7)。

マルコ山古墳の発掘によって生じた疑問を解消すべく、網干は「キトラ」古墳の発掘を切望

するようになる。一九八二年に関西大学考古学研究室により墳丘と周辺地形の測量が実施された。発掘調査はすぐには実現しなかった。当時、阿部山へと向かう道路は狭く、対向車をかわすのにも苦労していた。仮に高松塚古墳のような騒ぎになれば大混乱になりかねない。そうした地元感情もあり、発掘調査が実現するまでには一五年ほどの歳月を要することになる。

掘らずに壁画を確認

しかし、その間、手をこまねているばかりではなかった。

一九八三年一月にNHKの協力を得て、盗掘坑の小さな穴からファイバースコープを挿入して石室内部を探索することが試みられた。奈良国立文化財研究所(現、国立文化財機構奈良文化財研究所)所長の坪井清足、マルコ山古墳の調査にも参加していた同研究所の猪熊兼勝、古代史の泰斗で大阪市立大学教授であった直木孝次郎、そして網干が見守るなか、モニターに石室内の様子が映し出された。

「あったー!」

奥壁にアルファベットのQの字に似た画像をみて思わず網干が声を発した(図8)。三万画素の不鮮明映像ではあったが、亀に蛇が巻き付く玄武の画像を確認することができた。



図6・マルコ山古墳の石室内
漆喰は塗られていたが壁画は描かれていなかった。



図7・キトラ古墳の墳丘と立地(2002年)
墓道部調査中のキトラ古墳。丘陵の南斜面に築かれ、眼下に深い谷を望む。終末期古墳に特有の立地で、風水思想の影響がみとれる。